ばいとりて、われにみせよといひければ、日ごろそひてうかゞひて、からうじてにげたるをひてばいとりて、去うにとらせつ、へいちう悅てかくれにもてゆきてみれば、かうなるうすものゝ三重かさねなるにつゝみたり、かうばしきことたぐひなし、ひきときてあくるかうばしさ、たとへんかたなし、みればぢん丁子をこくせんじていれたり、又たきものをばおほくまろかしつゝあまたいれたり、さるまゝにかうばしさをしはかるべし、見るにいとあきまし、ゆゝしげに去をきたらば、それにみあきて心もやなぐさむとこそおもひつれ、こはいかなる事ぞ、かく心ある人やはある、たゞ人ともおぼえぬ有さまともと、いとゞ去ぬ計おもへどかひなし、

〔枕草子〕〔二〕こゝろときめきするもの　かしらあらひけさうして、かうに去みたるきぬきたる、ことに見る人なき所にても、心のうちはなほおかし、

〔袋草紙〕〔三〕予〇藤原清輔　先年如此事ニ逢、關白殿近衛御所女房ノ車寄ノ前ニ、人五六人女房ト言談而有事次テ、薰物ヲ一囊被出、人々競取之、越中守顯成取見之、已非薰物、人々笑之分散、翌日ニ又同所ニ人々祗候、此日ハ予モ候、然間自女房中送書狀、開見之ニ有歌、薰物ニコヽロヲソサノ程ハミエニキト云々、元句不覺也、人々興遣各讓于予、心中ニ案樣、昨日此所ニ御座ケム人々ノ御沙汰也トテ、欲逃而可見讓無人、默止バ予耻之由存之間、虛薰物ト云事有カシト覺悟、仍須臾廻思之處、如形成篇詠云、

たまだれのみすのうちよりいでしかばそらだきものとたれもしりにき、北政所聞食テ御感無極テ、實薰物一囊ヲ下給、于今納筥中、和歌爲體雖異、臨時有面目、世以爲美談、仍暫所書置也、後日可改弃、抑此度空薰物之句多出來、仍此歌彌惡歌ニ成乎難堪、